

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



春蒔きナタネは予想以上の収穫！
秋蒔きナタネも順調に育っています！

9月2日から10日間、ウクライナに行ってきました。4月に蒔いた春蒔きナタネは、発芽後の雪や乾燥等で心配されましたが、農業大学のディードゥフ教授や、現地での管理をお願いしている汚染地域の土地管理センターの方々の努力下、当初の予想を上回る1ヘクタール(ha)当たり1.7トンの収穫(種子)がありました。実験も順調に進み、肥料の違いによる収穫量と放射能吸収のデータも出始めています。12月末に分析が終わる予定。8月末に植えた秋蒔きナタネは、ちょうど発芽し双葉をのぞかせていました。



〈住民説明会の様子〉

我々から提案した契約書も、現地側の修正を経て、まもなく締結の予定です。契約当事者は、我々の他に農業大学・ナロジチ地区行政庁・ナロジチ地区議会・チェルノブイリホステージ基金、そして土地管理センター(国の緊急事態省傘下)です。お互いの役割を果たし、ナロジチの復興を目指すことが記されています。

9月7日には、ナロジチ町議会で初めての住民説明会を行いました。30名ほどの町民が集まり、私たちの計画を熱心に聞いてくださいました。これを第一歩とし、プロジェクトの成果が住民に還元されるよう頑張ります。(河田)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表:小牧 崇

郵便振替:00880-7-108610

TEL/FAX:052-836-1073(月・水・金 10:00~17:00)

ホームページ: <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

フロント設置場所選定を巡って

9月5～7日、ナロジチ地区を訪れ、「菜の花プロジェクト」のバイオディーゼル燃料とバイオガス製造装置の設置場所調査を行いました。これまで、設置場所は飼料工場と決まっていたのですが、敷地内にパン工場ができたため、衛生上の配慮が必要になったことと、近くに高圧電線が通っていることが防火防災の法律に触れることが判ったため、飼料工場を断念しました。

代替案の一つは、旧コルホーズ内の間口 20m奥行き 100m (600 坪) のジャガイモ倉庫でした。ここは、広さも水利も申し分ない場所ですが、周囲に柵がなく泥棒に機材を盗まれる可能性があるため、これも断念。途方にくれていた僕に、ナタネ栽培をしている「ナロジチ地区無条件移住区域土地管理特殊ステーション (土地管理センター)」の隣地ではどうかという提案がありました。建物は煉瓦作り (103 坪) で、水を 100m 程

先から引かなければなりません。製造装置の設置条件に適合し、隣地が同ステーションであることから、泥棒の心配がありません。また、農業機械の修理工場を併設しているため、工事機材の修理もできます。その上、原料のナタネやバイオマスもセンターで保管しているので、原料の運搬移動の手間が省けるという最適な場所です。

準備不足や現地の事情の変化などもあり、候補地が転々となりましたが、この場所に決定すべく最終調整中です。
(原 富男)



<BDF&BG 設置予定の土地管理センター>

「菜の花便り」その3

5日、ナロジチ行政庁から 緑色の農大の車に同乗し東へ 15 分、秋空の下、アヒルの群が池でのんびりしている様子を左手に、未舗装の道に揺られながら、正直ピクニック気分フィールド見学に出ました。現地はすでに春蒔きのナタネは刈り取られ、どうしてココとわかるのかと思うほど、見渡す限り平らな大地でした。放射能さえなければ、黄金色の麦の収穫時期のはず。このあと行ったコルホーズは、【青い窓



枠の小さな家で、真っ赤なりんごの木があって、馬が・犬が・猫が・鶏がいて、大きなかぼちゃがゴロゴロあって、きれいなスカーフを被ってバケツを持ったおばあちゃんが立ち話をしていて、ロシアの絵本に飛び込んでしまったような通りをぬけたところ】にありました。そこは、広ーい敷地に 細長ーい飼料倉庫が何棟かあるのですが、馬車に乗ったおじさんが 1 人作業に向かうのを見ただけで、誰もいない、白・黄・紫の花でいっぱいの静かな処でした。未来を手にしようとした矢先、被災地ナロジチは、時間が止まったかのように、暮らしも 美しい自然もそのままです。こんなところに誰が放射能が存在すると思うでしょう。

一見うらやましく感じる穰^{ゆたか}さは、人々に病しかもたらしません。手渡されたりんごも一瞬ためらって食するのです。いつも不安と隣り合わせの彼らと、5 年後の安心を訴える私たちとの温度差を感じないわけにはいきません。しかし、朝早くから病院を訪れる子ども達のためにも、土壌浄化の必要性を感じました。
(榎本恭子)



ナロジチ地区の被災地住民調査 (戸村京子)

9月代表团とは、一部別行動をしながら、ナロジチ地区の実情を調査してきました。同行したのは、写真担当の神野美知江さん、ビデオ撮影をしている宮腰さんと、通訳の竹内さんです。

ナロジチ地区の放射能汚染地の現状、住民が移住した村々の様子や、今も住んでいる村での人々の暮らしぶり、放射能防護の対策や「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」についてなど、聞き取り調査、その他地区に関するデータの入手などが目的でした。

<汚染地の現状>

原発から70キロのナロジチ地区には、セシウムの汚染レベルによって区分されている第2ゾーン（本来は移住すべき地域）、第3ゾーン（希望すれば移住できる地域）、第4ゾーン（移住はしなくてもいいとされている放射能管理地域）のそれぞれがあります。放射能汚染地図を見ると、ナロジチ地区の中央部が第2ゾーンで汚染値が高く、全村疎開が行われた村々が多くあります。北部に位置し、地区行政の中心で多くの人々が住むナロジチ町も第2ゾーンに属し、さらに北の第3ゾーンには多くの村々があります。ゲートで閉鎖されている中央部には、3~4家族が残る2、3の村があり、廃屋や森が続いています。幹線道路を南へ行くと、地区南部にはバザール村を中心に村が点在しています。このように、汚染のひどいエリアで地区が南北に分断された状態なので、全体の印象も寂れた感じが強く、地区の復興にも多くの困難が予想されます。

<住民聞き取り調査>

地図を片手に、移動のためにお願いした車で、広い地区内を東西・南北と移動しながら住民を探しました。限られた時間内に、8ヶ所の町村でいろいろな職業の9人の方々に協力をお願いし、お話を聞かせてもらいました。ここではその一部をご紹介します。

○**リュールカ村<第2ゾーン>エミアさん(年金生活・自給農家)**—自分はロシア出身、夫は隣村の生まれで両親が住んでいる。年金は行政が車で持ってきてくれる。事故はあまり覚えていないが、テレビで知った。今のところ健康上の問題はない。移住は、息子達の家族を優先させ、娘(当時10年生)と息子(同8年生)は他の所に住み、自分達は順番待ちだ。

○**リンツィ村<第3ゾーン>リディアさん(村議会議長)**—39歳の若い村議会議長は、2006年の選挙で選出された。他の事故で脊椎を損傷し障害者であるというが、とても活発な女性。自分の生まれたマリィンカ村は第3ゾーンだが、皆が移住し、家は壊され道のみとなっている。事故後は、若い人の職場が無いことが問題だ。村の予算は人件費のみで、復興には回らない。将来的には汚染を減らし、人々、子どもを守り、村の問題は村で解決したい。

○**ナロジチ町<第2ゾーン>フォードルさん(農業企業体)**—事故当時、このコルホーズで働いていた。最初、町の中を避難のバスや特殊車両が通って、事故があったことを知った。特に病気はない。放射能のことがあるので、きのこやベリーは少しだけとっている。「菜の花プロジェクト」については知っている。ドイツ人のナタネ栽培は様子を見ている。農業なくして、国は成り立たない。

*チェル救の「菜の花プロジェクト」については、初めての現地住民説明会が行われました。地区再生のための土壌浄化やバイオエネルギーの使用法など、これからも住民の意見を聞く機会を持つべきだと思います。

*今回の訪うは、チェル救の代表团メンバーではなく、大学から調査費助成を受けて実現しました。調査結果は論文にまとめるほか、被災者支援活動にも活かしていければと思っています。



ベラルーシ 取材報告

以前、インターネットでベラルーシでも土壤浄化目的の菜の花プロジェクトがある（あった？）らしいことを知り、いつか現地に行って確かめてみたい、と思っていましたが、この秋に急遽代表団の訪問に合わせてウクライナ入りしたときに、その足でベラルーシにも行ってきました。

今回、訪問したのは、ベラルーシ南東部のゴメリ州内のモーズィリで、ナタネ加工工場、菜の花栽培の実験場、菜の花畑を見せてもらいました。

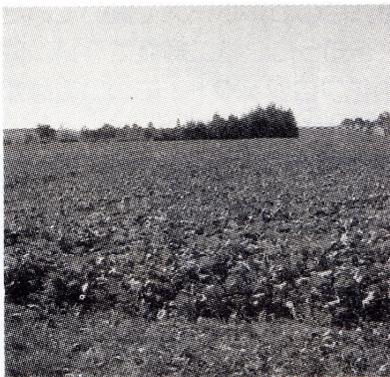


●ナタネ加工工場「プリピャチ」の工場長の話

ナタネはゴメリ州全域から持ち込まれます。ホイニキ、ブラーギンなどの汚染地で栽培されたものも含まれます。汚染地では今、主にナタネが栽培されていて、菜の花に土壤を浄化する機能があると分かり、今後さらに栽培面積を増やす予定です。収穫後の茎や葉については、以前加工後のものを圧縮して燃料にしたりして、すべて有効利用する仕組みを作ろうとしましたがうまくいかず、今は畑に放置している状態です。被曝対策は特にしていません。連作障害対策としては1年ごとに菜の花の次にライ麦・大麦・オーツなどを植えています。土壤の浄化はできていると聞いています。数値はゴメリの農業研究所の専門家に聞くとよいでしょう。ここでは国家プログラムとしてやっているの、国からの資金援助があります。今も種を乾燥する設備を全額国の資金で建設中です。この工場で1992年にベラルーシで最初にナタネの加工を始めました。2000年から5年間IAEAが資金提供した土壤浄化目的のプログラムが始まり、今は資金援助はありませんが、土壤のチェックや研究は続いています。ナタネの輸出は国家が禁じています。加工後、工業用油としてEU諸国などに輸出され、食用としても別のところでさらに加工されたものが国内市場に出ています。

●実験場の農業技師の話

様々な植物の実験を行っています。菜の花は冬蒔きのを49種類に分けて実験中です。実用としてもすでに100ヘクタール単位で栽培をしており、最近になって土壤浄化作用があることが分かって面積を増やす予定です。ナタネは工場「プリピャチ」で加工し、絞りがすは家畜の飼料になります。今は大豆も検討中です。土壤浄化も重要ですが、ここでは低コストで収穫量が多くなるような研究をしています。菜の花にとって重要なのは植える時期です。この地方では秋蒔きは8月の中頃、春蒔きは雪解け後に機械が入れるようになる時期です。今年は3月末に蒔くことが出来ましたが、例年は4月に入ってからでないと蒔けません。今、少しずつ気候が変わってきています。放射能については、ゴメリ州はセシウムとストロンチウムの汚染が強いんですが、汚染レベルごとに色分けした地図があり、ここはほとんどが低いです。2カ所だけやや高い箇所がありますが、許容範囲内です。



このプロジェクトが始まる前からの懸念として指摘されていましたが「仮にチェルノブイリ級の爆発事故があっても大地は再生できる」ということになると原発を推進する側としては都合がよいわけで、IAEAが実施したというプログラムにもそういう意図があったのかもしれない。チェルノブイリのはあくまでナロシチ再生が主目的ではありませんが、そういう風に捉えられる可能性があることは考慮しておく必要があるのかもしれない。（宮腰吉郎）

参考サイト：Seeds of Promise for Farmers

<http://www.iaea.org/NewsCenter/Features/Chernobyl-15/farm.shtml>

伊那合宿報告 伊那市 小牧崇

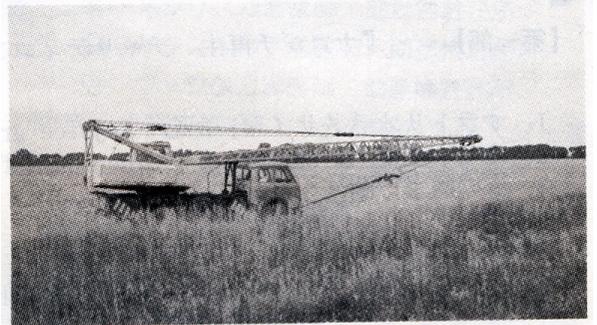
8月4、5日の二日間、恒例の夏合宿を行いました。合宿は救援・中部の長期的な方針を討議する場。5年間のプロジェクトがスタートしたばかりでもあるし、会議は短めにし伊那の自然を楽しむ時間も取ってもらえると良いなあ、と準備する側は考えていたのですがなかなかそうは問屋が卸しません。一日目、富県ふるさと館を会場に結局5時過ぎまで、目前に迫った9月訪問を始め、この秋に取り組む行事の打ち合わせをしっかりと行ったのでした。参加者は同行取材のテレビ局スタッフも含めると20名。近年例を見ない大人数です。それでも夜は林間でのバーベキューパーティー。途中テレビ取材を受けながら、夜遅くまで杯を傾け議論が続きました。定員が10名に満たない山荘に、この大部隊をどうお泊めするかという難題は原さんが「子問研山荘」への分宿を手配してくれて解決。

二日目はややゆったりとした日程で、宮腰さん作成の現地取材ビデオ鑑賞会やナロジチプロジェクトの先の見通しなど意見交換を終えて、車に分乗して小野寺さんの「土塊農場」や原さんの新しい作業場を見学した後解散となりました。

* * * * *

「ナロジチで、ドイツ人もナタネ栽培!？」

9月訪ウの直前、ホステージ基金から、「ナタネ栽培を計画中のドイツ人と会う気はあるか？」という質問が飛び込んできた。「それはどういうこと??」と皆、びっくりして良く聞いてみると、ドイツ人がナロジチ地区で大規模にナタネ栽培を予定しているという。私達の「菜の花プロジェクト」と何らかの提携ができないかと言うサブルク行政長の目論見らしい。



実際、話し合いの場に臨んでみると、彼は旧東ドイツ出身のロシア人であり、EU圏では石油代替エネルギーとしてBDF用のナタネ栽培が盛んなため、広大なウクライナに進出してナタネ栽培を行おうというビジネスマンであった。その面積たるや、4,000~7,000haだという。これでは私達の実験規模(4ha)とはスケールが違い、また、土壤浄化という目的からも逸脱する。私達の栽培地が第2ゾーンにあるのに対し、彼らの予定地は第3ゾーン。ナタネ収穫後のバイオマスや油粕は、放射能を考慮して特別に処理する考えはなく、作業者の放射能防護についての注意も特にならないという。

こうして、話し合いはかみ合う事なく、共同研究者である農大のディードゥフ助教授もまた否定的な意見であったため、それぞれの計画に沿って進められる事となった。その後、第3ゾーンのバス道路を通りかかったところ、広い土地が新しい大型耕作機械で耕されているのを見かけた。聞くところによると、その広い農地でのナタネ栽培は、最新式トラクターなどを使い、作業がたった4人でできるのだそうだ。これでは、地区に税収はもたらされるだろうが、現地の人々の雇用は期待できない。彼らのいう「第3ゾーンだから作物の栽培に問題ない」というのは本当だろうか。

また、ベラルーシでのナタネ栽培についても情報が入ったが(p4)、ここでも放射能防護やバイオマスの処理に問題ないとは言えない。

最近では、世界的にナタネ栽培がもてはやされているが、私達の菜の花プロジェクトは、汚染地の土壤浄化が第一の目的である。ドイツ人のナタネ栽培にも、私達の実験成果などが生かされたらと期待するのだが…。(戸村)

チェルノブイリ・ナロジチ再生チャリティコンサート 咲かせよう!菜の花~大地と人々に~

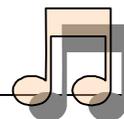
このポレーシェをお持ちください。
当日ご精算の上ご入場いただけます。
人数に制限はありません。

いよいよ一カ月後に迫ってまいりました。コンサートの会場は、結婚式も行われる美しく厳かな礼拝堂。そこに、後藤さんの素晴らしいソプラノが響くと想像するだけで、今から別世界に引き込まれそう

な幻想的な気持ちになります。

また、第二部の「菜の花プロジェクト」の講演会は、9月にウクライナを訪問した河田さんの、最新情報を盛り込んだお話です。チケットの販売は、引き続き行っております。ご予約・お問い合わせなど、お気軽に事務局までどうぞ。会場でぜひお会いしましょう。

(TEL・FAX 052-836-1073/Eメール chqchubu@muc.biglobe.ne.jp)



■日時 2007年11月10日(土) 午後1時開場 午後1時30分開演

■会場 名古屋聖マタイ教会 地下鉄桜通線「御器所4番出口」南へ徒歩4分(ロイヤルホスト手前右入る)

■入場料 大人2,000円 子ども(18才以下)1,000円

■プログラム

【第一部】 『ナロジチ再生 チャリティコンサート』

歌:後藤佳乃(ソプラノ)/ピアノ:伊藤美江

- 1、オラトリオ「メサイヤ」から Rejoice greatly, O daughter of Zion -作曲:ヘンデル-
- 2、オラトリオ「メサイヤ」から He shall feed flock like -作曲:ヘンデル-
- 3、海の底まで測りうる愛 -ウクライナ民謡-
- 4、鶯(ウソ) -ウクライナ民謡-
- 5、愛の喜び -作曲:マルティニー-
- 6、オペラ「妖精ヴィッリー」から「私がお前達のように小さい花だったら」-作曲:プッチーニ-

【第二部】 『ナロジチ再生・菜の花プロジェクトの意義』

救援・中部の河田昌東さんが、プロジェクトの意義や現地の情報をわかりやすく説明します。

CBC夕方報道番組「イッポウ」で、菜の花プロジェクトが紹介されました

「救援・中部」の活動に以前から関心を寄せてくださっているCBCのH記者。運営委員会にも出席し、「菜の花プロジェクト」に深い理解を示してくださっています。この夏、「8月の伊那の合宿で密着取材を」との、お申し出がありました。

1泊2日の合宿の会議を中心に撮影をし、真剣なメンバーの表情をカメラはとらえていました。この春、ナロジチで撮った宮腰さんの映像も交え、7分ほどに編集され、8月13日放映されました。

【撮影ウラ話】

昼間の熱い議論とは打って変わり、銭湯に浸かったあとの夜のバーベキュー&酒盛り中にも、しらふ(当然)のCBC取材班はカメラを回しています。一人ずつのインタビューもあり、真剣に話しているメンバーの後ろを、赤い顔の酔っ払いメンバーがうろろう。カメラは酔っ払いを避けることはできなかったのか、その夜のインタビューはすべてカット。あれが放映されていたら、チェル救の未来はなかつたらうなあ。CBCの方々には感謝する次第です。(市原)

サレジオ小学校の自転車は、ナロジチで活躍中!!【97号 (p2) で紹介】 (神野美知江)

昨年末、サレジオ小生徒会からいただいた寄附金で、ナロジチ地区の診療所で働く医師や看護師の往診用として、自転車 11 台が購入されました。

去る 6 月 8 日に、ホステージ基金のキリチャンスキー氏より「サレジオ小学校から提供された自転車の配備先は、以下の 10 ヶ所に決まった。」という報告がありました。



〈各施設代表者と自転車の集合写真〉

【配備された診療所】

- ① ノリンツィ地域病院
- ② ザリツィヤ医師駐在診療所
- ③ バーザル医師駐在診療所
- ④ セレツ准医師・助産婦駐在所
- ⑤ ラトチャ准医師・助産婦駐在所 (2 台)
- ⑥ ラスクィ准医師・助産婦駐在所
- ⑦ スヌイトウイシエ准医師・助産婦駐在所
- ⑧ メジリスカ准医師・助産婦駐在所
- ⑨ ザクスィルィ准医師・助産婦駐在所
- ⑩ ヴァジウカ准医師・助産婦駐在所

今回の訪問では、ナロジチ地区の住民への聞き取り調査を行い、その中の「ラスクィ准医師・助産婦駐在所」を訪問し、聞き取り調査とともに、医療機器の配備状況を見せていただき、自転車配備についてもお尋ねしました。ウクライナの自転車は、ペダルが後輪の回転と連携しているのでチェーンの遊びが無く、片足で勢いをつけて乗る方法でしか乗れない私は、試乗することができませんでした。自転車通学をしていたはずなのに…。助産婦さんが満面の笑みで診療所前の道を走ってくださったことで、いかに役立っているかが伝わりました。



〈ラスクィ准医師・助産婦駐在所の助産婦さん〉

来春～初夏に、「2008 菜の花スタディツアー」を実施します。

いよいよ動き出した菜の花プロジェクト!!

今回の訪問で、ナロジチの皆さんに、このプロジェクトは故郷を取り戻し、農業を再開するためには、とても大切な事業だと伝えました。半信半疑の聴衆でしたが、それでも私たちが本気だという熱意は伝わったと思います。今後も勉強会を兼ねて、ナロジチを訪問する毎に説明会を行います。

BDF (バイオディーゼル燃料) & BG (バイオガス) プラントの設置場所もほぼ確定しました。

さて、プロジェクトに賛同していただいた皆さん! ナロジチの菜の花畑を訪ねてみませんか? 来年 6 月下旬～7 月初めの約 10 日間、「第 5 回 スタディツアー」を開催します! スタディツアー企画担当者も決まりました。(美)



チェルノブイリの子ども達へ クリスマスカードを贈ろう！



チェルノブイリ原発事故から 21 年が経ちましたが、2007 年現在でも、汚染された地域では、事故で親を亡くしたり、放射能被害に苦しむ子ども達がたくさんいます。子ども達は、時間の経過とともに事故が過去のできごととして風化され、自分達は社会から見放されるのではないか、という不安な気持ちで暮らしています。

遠い日本からクリスマスカードを贈るということ自体が、「自分達は忘れられていない」と、彼らを精神的に支えます。皆さんの被災者への想いや励ましの心を、ウクライナの病院や孤児院にいる子ども達に贈りましょう。ウクライナの子ども達は、クリスマスにあなたの作ったカードが届くのを楽しみに待っています！！

【カードの贈り方】

- ① カードを作ります。現地公用語はウクライナ語ですが、日本語でも英語でもロシア語でもかまいません。写真などを入れてくださるのも大歓迎です。あなたの想いをこめてください。
- ② カードを封筒に入れ、封はしないまま、さらにひとまわり大きい封筒に入れて当事務局まで送ってください。締め切りは **12 月 14 日(金)必着**です。
- ③ 皆さんから頂いたカードを事務局でまとめ、現地へと発送します。その際、事務局で日本の写真や折り鶴なども同封する予定です。

【カードの送り先/問い合わせ先】

チェルノブイリ救援・中部

クリスマスカードキャンペーン 宛

送り先：〒466-0822

名古屋市昭和区楽園町 137

楽園アパート 1-10

電話/Fax：052-836-1073

(月水金 10:00~17:00)

E-Mail: chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

昨年は、1,745 通のクリスマスカードが
ウクライナの子ども達に
笑顔をお届けしました☆彡



こんにちは!!

9月から半年間研修させて頂きます、大学3年の澤木と申します。

現在は、ミルクキャンペーンとクリスマスカードキャンペーンを、田口さんと担当しています。

ポーシェの記事を書いたり、チラシを作ったりと、NGO のこと、事故のこと、現在のウクライナのこと、勉強しながらで手探りで研修を進めています。自由にやらせて頂いているので、わくわくするし、楽しいです。

頑張りますので、よろしくお願いします。

ミルクキャンペーンのお知らせ

～ミルクを必要としている赤ちゃんがいます、生きるために～



今から 21 年前、1986 年 4 月 26 日、旧ソ連のウクライナ共和国でチェルノブイリ原発事故が起きました。放射性物質が土や水、草に入り込み、たくさんの人々が内部被曝を起こしました。その影響は子どもに顕著で、多くの新生児の命が奪われ、あるいは健康を損なったまま成長しました。

当時の子ども達が母親になりました。その母親の母乳もまた放射性物質により汚染してしまいました。わが子の空腹を満たすために、母親は汚染していると知りながら放射能が蓄積した母乳を与えています。それを口にした赤ちゃんへと、被曝の連鎖が続いています。

どんな人間も健康に生まれ、健康に生活を送っていく権利があると思います。

そこで、「チェルノブイリ救援・中部」では、そんな被曝の連鎖を断ち切るため、母乳が汚染されており、かつ貧困のためミルクを買うことのできない人々に、粉ミルクを贈るための寄付金を募っています。みなさまからの寄付金は、私たちのウクライナ現地のパートナーである団体（チェルノブイリホステージ基金）に送り、そのお金で現地団体が粉ミルクを買い、支援先の人々に贈ります。毎年約 2 トン、毎年 1～2 万人の新生児が汚染していない粉ミルクで助かっています。

未来を築いていくのは子ども達です。少しでも多くの赤ちゃんが汚染されていないミルクを飲むことができるよう、**みなさまの暖かいご支援をよろしくお願いします。**

<送信方法>

郵便局で「郵便振り替え用紙」に必要事項を記入の上、下記あてに振り込んでください。（一口おいくらでもかまいません 「ミルク代」とお書き添えください。）

振込先：チェルノブイリ救援・中部

口座番号：00880-7-108610

☆自己紹介☆

みなさん、はじめまして 田口雄一と申します。現在大学 4 年生で初等教育について学んでいます。ハワイに留学中に多くの国々の人と接するなかで、国際 NGO に興味を持ち、「NGO の現場を肌で学びたい！」と思い、今回チェルノブイリ救援・中部でインターン生としてお世話になることになりました。どうぞよろしく申し上げます。



急務の新エネルギー開発

----- 原発回帰は危険な道 -----

アメリカで、最近新たに原発2基の建設が申請された。今後もさらに増える気配である。これは、1979年のスリーマイル島原発事故以来、28年間続いてきたアメリカにおける新規原発建設中止の流れを破るもので、世界に大きな影響を与えよう。経済成長が続くインドや中国でも、原発建設は計画されている。すでに多くの人々が指摘してきたように、これは世界のエネルギー需要増大と石油資源枯渇を目前に控えた、新たな展開の始まりである。しかし、原発に活路を求めるのは危険な賭けである。チェルノブイリの再現は、絶対避けなければならないし、子孫につけを残すだけの放射性廃棄物は、将来にわたって世界を脅かすだろう。

● 日本が原発で稼ぐ国に

浜岡原発や福島原発、柏崎・刈羽原発など、日本で沸騰水型（BWR）の原発を作ってきた東芝は、2006年にアメリカの加圧水型原発（PWR）最大手のウエスチングハウス社を買収し、世界最大の原発メーカーになった。

同社だけでBWRもPWRも建設できるわけで、今アメリカで計画されている原発は、東芝が受注する予定である。東芝は、中国やインドでの原発建設にも意欲を示しており、日本は「原発で稼ぐ国」になった。チェルノブイリ事故で、ヨーロッパ諸国は原発の段階的廃止を打ち出してきたが、エネルギー危機を機に、世界は原発に復帰すると読んでの方針転換である。

しかし、これは大きな賭けである。チェルノブイリ級の事故は今後絶対に起こらない保証はない。一度起こればおしまいである。加えて、世界のウラン資源は石油とほぼ同じ寿命で、いずれは枯渇する。残るのは放射性廃棄物だけである。こうした刹那的なエネルギー政策は、世界の未来を危うくする以外の何ものでもない。

● 電気自動車はエコロジカル？

最近、アメリカでは「家庭の電源から充電できる電気自動車がエコロジカルだ」として、利用者が増えているという。日本でも早晚登場するだろう。しかし、これは大きな間違いである。家庭の電気は、発電所から送られてくる。発電所では、石炭や石油・天然ガス・原発・水力などで発電している。この中、火力発電では燃料に含まれるエネルギーの40%しか電気にな

らず、残りは大気中や海に熱として捨てられている。原発は火力よりも効率が悪く、ウランのエネルギーの30%しか利用できない。こうして、電気自動車が増えれば増えるほど、炭酸ガスの排出量は増えて地球温暖化は進み、原発のニーズが高まることになる。皮肉なことに、ガソリン車のほうが電気自動車よりエコロジカルである。

● 食糧とエネルギーの争奪戦

最近はまだ、炭酸ガス収支がゼロだとして、バイオエネルギーが脚光を浴びている。アメリカでは、トウモロコシからガソリンに添加するバイオエタノールをとるために、大豆農家がトウモロコシに転換し、他の食用や飼料用穀物がバイオエタノール用に買い取られて品薄になり、価格高騰が続いている。アメリカに穀物を大きく依存する日本でも、砂糖や様々な食品の値上げが始まった。一方で、アフリカなどでは食糧危機が絶えない。「エコカー」は、途上国の人々の命を奪いながら走っている。先進国の需要抑制と連動しなければ、どのようなエコロジカルな取り組みも自己満足でしかない。

● 持続可能なエネルギーの開発に転換を

食糧と競合しないバイオエネルギーを含む、あらゆる持続可能なエネルギーの開発と社会への定着が、急務である。この分野で、日本は圧倒的に立ち遅れており、化石燃料依存から一刻も早く脱却しなければならない。（河田）

竹内さんのウクライナ便り

10月に入って、キエフの気温は20℃を切りました。おおよそ好天が続いており、街路樹はゆっくり色づき始め、森の中でも散歩すれば気持ちがいいだろうと思わせられますが、私の住んでいる集合住宅はバス通りに沿って建っています。おかげで交通の便はよいのですが、近年とみに増えた交通量から考えて、空気もあまりきれいではないだろうと推測します。まあ、豊橋で国道1号線のすぐそばに住んでいた時のことを思えば、まだましかもしれません。

9月30日に行われた最高会議選挙の結果については、日本のマスコミでも報道があったと思いますが、10月5日現在、いずれにしても連立とならざるを得ない新内閣を組織するのはどういう政党の組み合わせなのか、未だに不透明です。選挙戦中の立候補者たちの発言から考えると、得票率30%強の「ユーリヤ・ティモシェンコ・ブロック」と、14%程度の大統領支持派閥「我らのウクライナ+国民自衛」が中心となって組閣が進むのが順当なのですが、ユシェンコ大統領がこの2者に対し、得票率34%強で一応首位を占めている「地域党」との話し合いを指示するということがあり、大統領の真意が取り沙汰されています。ユシェンコ氏と必ずしもそりの合わない、しかも国民の一部に根強い人気を持つティモシェンコ氏が再び首相の座に返り咲くことを警戒しているのか、あるいは、事前の「根回し」を行うことで、「地域党」が野党に回っても議事が円滑に進行することを期待しているのか。本紙を皆さんが手に取られる頃には、すでに組閣が終わっているかもしれませんが(ことがそのように順調に進むことを願いたいものです)。

さて、これも日本でニュースになったかと思いますが、9月17日、チェルノブイリ原発4号炉の「新石棺」及び同原発敷地内の第2使用済み核燃料貯蔵施設の建設について、それぞれフランスとアメリカの企業との契約が

締結されました。署名式には、ユシェンコ大統領とヨーロッパ復興開発銀行総裁が立ち会ったということです。後者を通じて、ヨーロッパ諸国から3億3百万ユーロが提供されるとのこと。現在の石棺をすっぽり覆うアーチ形の「新石棺」は100年間の安全を保障することになっており、5年後に竣工の予定。第2使用済み核燃料貯蔵施設には、原発の1号炉から3号炉までに装荷されたままの燃料のほか、数年後に使用期限が切れる既存の第1施設に貯蔵されているものが移されるそうで、こちらの建設は4年4ヶ月後に完了の予定です。しかし、いずれの施設も、設計にこれから1年半が見込まれているようで、その間に建設費が増加したり、竣工までの期間が延びたりということも充分あり得るでしょう。

選挙の前日、9月29日には恒例のウクライナ日本語弁論大会があり、大学生の部で同点1位だった2人のうちの1人は、「人間と自然」というテーマを取り上げ、環境破壊を憂えていました。その対策としては、まず道にごみを捨てないことから始め、さらに子どもたちが自然を愛するような教育をすることが提案されていました。確かに、タバコの吸殻やペットボトルの路上での投げ捨ては、キエフの街角でよく見かけることであり、マナーを正してもらうに越したことはありません。しかし、「危険なごみ」の最たるものであるチェルノブイリ4号炉の処理についても、市民の関心が高まってよいのではないかと思います。(10月5日)



事務局便り

…キンチョウ～の夏は終わった! そして、もっと、気を引き締めて!! の秋本番…。

煌々と輝く中秋の名月に、確かに「秋」の訪れを感じるが、昼には未練がましい「夏」が留まり、季節の移ろいは遠く感じる。…と書いた翌日から、えらく涼しくなり…と思っていたら、10月に入り、まだ、日中は半袖で過ごしている。季節の実態は確実に変わった。それはさておき、長い夏に辟易としていたところに加え、チェル救は「ウクライナ派遣団」、「日本留守番組」の双方が、それぞれの「現場」で「熱い」時を過ごした。

派遣団を送ったあと、その留守番時に「何かが起きる」を経験していた私としては、ともかくも「今回こそは、何もなくて経緯してほしい」と思っていたが、意に反し、またもや難問発生となった。「留守番組」は第3者というか、思いっきりサポーター方々の知恵もお借りし、問題解決のための基本的なスタンスを決め、「派遣組」帰国時すぐの緊急会議をもった。スタディツアー以来、活動に深くかかわってくださっている神谷さんと「現場監督」?原さんとが本領発揮、留めの交渉。一件落着となった。…「事務局便り」にその内容はとうてい書ききれないので、他の機会の報告としたいが、ともかく、「金鳥～?」否「緊張! ?の暑い夏」であった。さて、話は変わるが、今年もまた、研修生2人が事務局にやってきた。二人は、大学生3年生と4年生。講義の合間をぬって、2時間近くかけ、事務所にやってくる。初めての仕事は、恒例のミルク・カードキャンペーン。彼らはカードづくりなどの企画があれば皆様の所まで馳せ参じるので、是非、そのような企画が可能な折には、ご一報いただきたい。(山盛)

お詫びと訂正

ポレーシェ100号の表紙のボランティア貯金寄附金配分の記事で、「今年の配分を受けた団体のみが、今後5年間にわたり申請・配分の資格を得る事ができる」とありますが、来年度の申請は今年の配分を受けた団体のみではなく、新たに審査があり、また今後5年間にわたり申請・配分の資格が得られた、というわけではありません。この件につき、日本郵政公社の担当の方からご指摘をいただきました。読者の皆様に誤った情報をお伝えしてしまいましたことを、深くお詫び申し上げます。

編集後記

- ☆ 今夜はシャワーにしようか、それとも湯船に? 暗くなると外気が涼しく、虫の音が心地よい。秋の夜長に読書…とりたいが、夜半までPC相手に編集作業をしては、風情もない。(美)
- ☆ 今回のナロジチ訪問時、キエフからバスを利用した。いくつかの村や小さな町を通った後、ゲートで封鎖された中、森に覆われ朽ちかけているポリスケという街を通り過ぎた。ここの住民達は、どこでどのように暮らしているのか? 森では今、きのこの季節が廻ってきている。(京)
- ☆ 造顔マッサージ、効果あります。洗顔後の3分間、このマッサージに命、いえ時間をかけている分、歯磨きがおろそかになり、歯肉炎になってしまった。女はいろいろと忙しい。(佳)
- ☆ 世界を震撼させた「911同時多発テロ」から、丸6年。アメリカ政府の公式見解(アルカイダ犯行説)に異議を唱える声が、いよいよ世界中に広がり始めている。日本では、安倍前首相が「テロ特措法」の延長に職を賭し、あっけなく辞任。日本が貸し付けている資金(米国債)が、アメリカのテロ戦争を支えている。その資金の活用こそが、世界平和の鍵だというのに…。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473